Equatorial Biomass Society No.17
March 2014

17

熱帯バイオマス社会

調査報告
アナップ川流域の村落調査の報告：
イバンとブカタンの移住史を中心に
加藤 裕美 / 鮫島 弘光 / 市川 昌広 …… 1
SPFプロジェクトでの野生生物による塩場の利用
ジェイソン ホン …… 8
関連活動記録
2014年1-2月プロジェクトメンバー活動報告 …… 10
ボルネオの狩猟採集民研究の動向：
第10回国際狩猟採集社会会議に参加して …… 12
プロジェクト参加メンバー紹介 …… 14

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究（S）

**東南アジア熱帯域における
プランテーション型バイオマス社会の
総合的研究**

トゥバウのカンティンで遊んでいる子どもたち
（写真：祖田 亮次）

調査報告

アナップ川流域の村落調査の報告：イバンとブカタンの移住史を中心に

加藤 裕美（京都大学 白眉センター／東南アジア研究所）
鮫島 弘光（京都大学 東南アジア研究所）
市川 昌広（高知大学 農学部）

はじめに

本稿は、2011 年 8 月 23 日から 25 日に、市川昌広、鮫島弘光、加藤裕美でおこなった、アナップ川流域の村落調査の報告である。この調査では、市川、加藤ともにこの地域を訪れるのが初めてであるため、アナップ川流域のおおよその概況を把握することを目的とした。本稿では、調査時の行動記録と、村でインタビューをした内容を抜粋して報告する。インタビューをおこなったのは、アナップ川上流の Rh. Mawang と Rh. Entri、アナップ川中流の Rh. Gerina、Rh. Banda、Rh. Jatun、タタウ川下流の Rh. Jalong である（図 1）。Rh. Mawang と Rh. Entri、Rh. Gerina はイバンがマジョリティのロングハウスである。Rh. Banda と Rh. Jatun はブカタンがマジョリティのロングハウスである。Rh. Jalong はタタウとイバンが混住するロングハウスである。

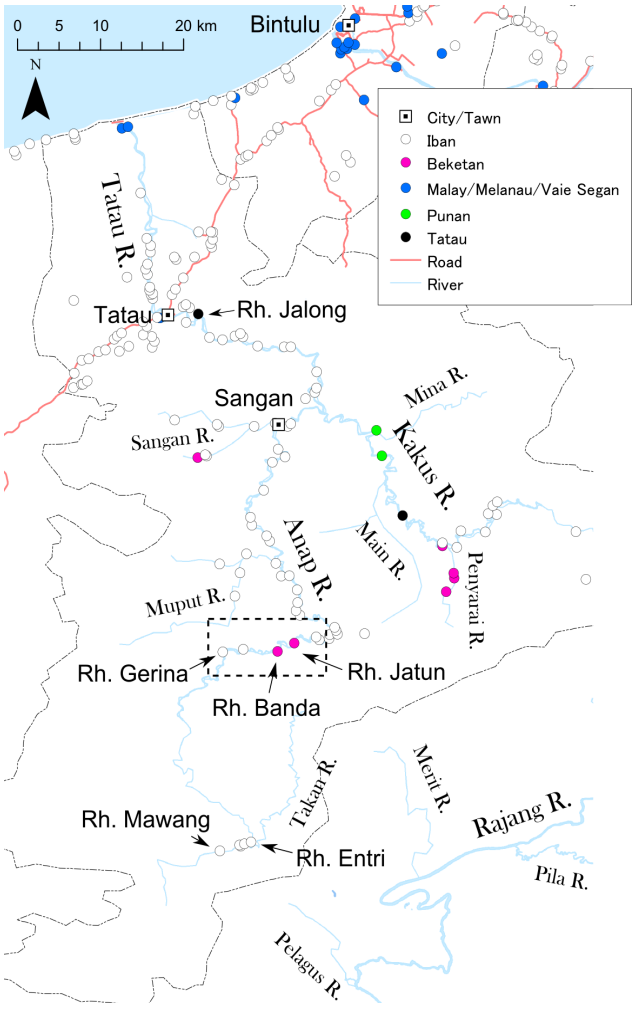

図1: 調査地の位置

調査では、全村を通して統一的な情報を得ることを心がけた。インタビューの際に聞いたのは、移住の経緯、かつての森林産物交易の状況、現在の在村状況、生業活動、インターマリッジの状況などについてである。また、狩猟や野生動物の生息状況についてもインタビューを行った。以下では、調査を行った各ロングハウスのおおよその概況を示したい。紙面の都合上、すべての内容を記すことはできないため、本稿で述べきれなかった情報は、別稿に記したい。

Rh Mawang (NangaTakan)

Rh. Mawang では、市川と加藤を中心に移住の歴史や森林産物交易についてインタビューを行った。鮫島は、狩猟や動物についての聞き取りを行った。

生業としては、稲作と狩猟が盛んである。稲作は、陸稲しか育てていないが、毎年十分な収穫に恵まれているという。また、このロングハウスでは、Zedtee の施業区域内にあることもあって、1992 年から Zedtee で働く人が多い。現在、全体の 75% ほどが Zedtee で働いている。それ以外にも Rimbunan Hijau や Shin Yang、Samling などの伐採会社で働いている人も少数いる。町で働く人はあまりおらず、在村世帯も多い。

狩猟については、イノシシは一年で 40 頭ほど取れ、スイロクは一年で 20 ～ 40 頭とれる。ホエジカは一年で 20 頭ほどとれる。ブタオザルは、bubung という箱罠によく引っかかるとのことであった。Rh. Mawang の人々が認識しているイノシシの種類は 4 種類ある。また、ホエジカは 4 種類、スイロクは 3 種類、マメジカは 2 種類を認識している。Rh. Mawang の人たちが認識する各動物の種類は表 1 に示すとおりである。

アナップ川上流におけるイバンの移住史

アナップ川上流にある 5 村（Rh. Mawang, Rh. Entri, Rh. Belong, Rh. Sayong, Rh. Gasah）は、もともと Ra-

動物の方名	特徴
イノシシ	
Babi Nibong	体は小さくて黒く、毛は短い。たまに見かける。
Babi Kanbam	生息数は少ない。体は大きくて匂いが強い。鼻が大きく、ほほが高い。5 年から 10 年に一度やってくる。36 年で 3 回だけやってきた。
Babi Bulan	一番多い。体は白い。一斉開花の時にいるイノシシでもある。稲やトウモロコシ、キャッサバを餌食する。
Babi Lengkae	ふつうのイノシシ。
ホエジカ	
Kijang Ngenuling	一番多い。赤い。
Kijang Kerangas	2 番目に多い。黄色い。
Kijang Balut	バラムやブラガにいる。
Kijang Bera	一番小さい。山にいる。赤と白が混じった色。
スイロク	
Rusa Ubi	1 番多い。角がある。
Rusa Lalang	2 番目に多い。体は小さい。角はある。
Rusa Balut	角はあっても短くて見えない。1 年で 4 ～ 5 匹とれる。
マメジカ	
Pelandok Kemayang Panas	
Pelanndok Tu(a)mping	

表 1: Rh. Mawang の人たちが認識する動物の種類

jang 川の支流、Kanowit 川上流の Julau にある、Rh. Assan から移住してきた(図 2)。1947 年頃に移住してきた。移住に際して、Sibu の行政官にお願いし、許可を得てきた。移住前のロングハウスは Julau 川上流の、Nanga Julau のバザールから 15 馬力の船で 15 分ほどの距離に 15 世帯があった。Julau ではゴムを掻いて生計を立てていたが、当時の価格は RM0.20/kati と安く、骨が折れた割にはあまり儲けがなかった。また村の周囲がすべて稲作二次林（temuda）になってしまったため、未開墾でイノシシや魚が獲れる森を求めてここに移住してきた。

村長の Mawang さんは、まだ未婚の 1964 年ごろに移ってきた。移住の経路はカノウィット川を下り Rajang 川にでて、Rajang 川を遡りカピットで船の中で 1 泊した。翌日 Rajang 川をさらに遡り Pelagus 川に入り、Pelagus 川の上流の Iran 川にある Rh. Massam で 1 泊した。その後 Iran 川のさらに上流にある Dapu 川から荷物を担いで 6 時間歩き、峠を越えてアナップ川の今のロングハウスよりも少し下流にある Kilong 川に出てきた。当時、それ以外にも移住してきていたイバンがいたが、彼らは許可を取らずに隠れて移住してきたので、のちに Pila 川や Julau 川へ再移住した。

1960 年代には、今よりも下流の Rengas 川（Kilong 川の河口の対岸）にヤシの葉を屋根に使ったロングハウスを建てて住んでいた。アナップ川上流ではブカタンが一番先に住んでいた。Rh. Mawang の人たちが移住した当時は、焼畑を作り、ラタンやエンカバンをカピットに売りに行って生活をしていた。当時は、Julau から全部で 20 世帯が移住してきたが、その後も Sarikei から 2 ～ 3 世帯、Saratok から 4 ～ 5 世帯、Skrang から 4 ～ 5 世帯、Assan（Sibu の少し上流）から 7 世帯と徐々にイバンが移住してきた（図 2 参照）。

1973 ～ 74 年には、政府は華人の共産主義者の根拠地となることを恐れてアナップ川上流の居住を禁止し、住民は Oya 川の中流にある Sekuau 川に短期移住（group resettlement）をさせられた。Sekuau 川にはアナップ川上流からだけではなく、Kapit や Bintangor、Beduk など様々な地域から人が集められた。1974 年には Sriaman の行政官が華人の共産主義者を集めて木材伐採や学校建設などのコントラクターとしてのライセンスを与えた。その結果、1975 年には、政府による短期移住が終わり、アナップ川上流に戻ってきた。そして、再びラタンやエンカバンを探しカピットで売って生計を立てていた。1970 年代にはタタウから華人がエンカバンを買いに来ることもあった。タタウの旧バザール（pasar lama）に住んでいる華人である。最近では 2009 年 8 月にエンカバンの花が咲いた。2010 年 3 月 4 月に実がなり、この村では全戸がエンカバンの実を集めたが、値がつかなかった。

1976 年に Rh. Belong が、そして 1978 年には Rh. Gasah がこのロングハウスから別れた。その後さらに、Rh.Gasah から Rh. Sayong が分かれた。以下の Rh. Entri を含めて、アナップ川上流の 5 村は出身が同じなので村の境界は特に定めていない。

Rh. Mawang から Nanga Dakat を下った右側には、ブカタンが 1920 年～ 30 年ごろに住んでいた時の墓があるが、見逃してしまう。また、Rh. Enteri の近くには、Pemali Bukit Tugong という場所がある。ここは、19 世紀半ば（James Brooke が統治する前）に 18 ～ 20 人の Kenyah が Baram から戦闘に来て、イバンと戦って死んだ時の墓である。Bukit Tugong は、かつて Kenyah が使っていた戦闘路である。そこを通って Rajang 川の Merit, Kanowit, Belaga, Pelagus など様々な場所へ通じていた。現在 Bukit Tugong を通るときには慰霊のために木を置いているとのことであった。

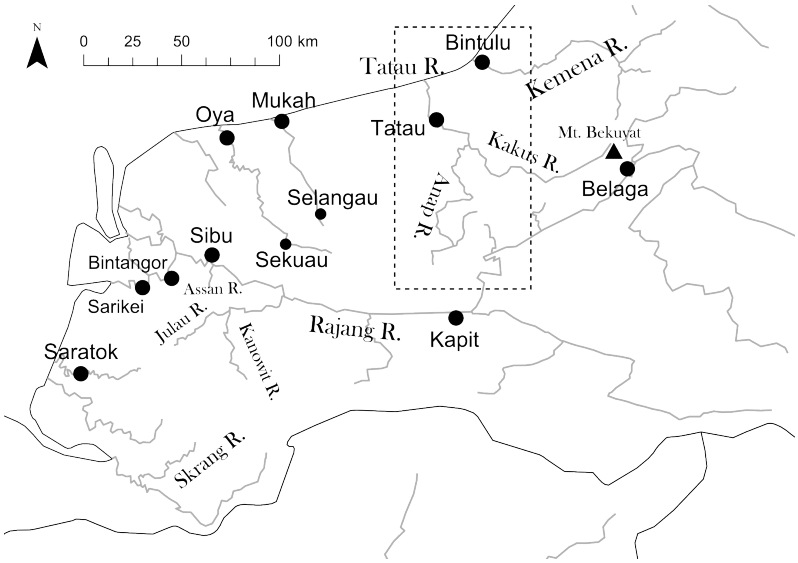

図2: タタウ川周辺の河川

写真1: Rh. Mawangの前を流れる澄んだAnap川で、夕方遊ぶ子供達

写真 2: Rh. Mawangの村長とインタビューに協力してくれた方々と

Rh. Enteri (Nanga Takan)

市川と加藤で世帯調査を行った。かつてJulau川にいたときは、Rh. Assanといい、上記のRh. Mawangと同じ村であった。移住後、アナップ川においてもRh. Assanといった。現在Rh. Enteriの外では屋根に使うヤシの葉を干していた。また、ロングハウスにはコショウの精製機が置いてあった。コショウは、2004年には政府のプロジェクトによって全世帯が1000本以上植え、1500kgほど売った。しかし、3年目に病気で枯れてしまったという。稲作は、Rh. Mawangと比較するとあまり盛んではない。また、Zedteeで働く人の人数も少なく、その分都市で働く人が多い。かつては、エンカバンの採集が盛んであった。最近では、2010年にはエンカバンの実がなり、油は自家用に保存してあるとのことであった。

アナップ川上流では、小学校はRajang川流域のPelagusへ行き、中学校はカピットへ行く人が多い。Pelagus の小学校は1975年にできた。ここの村ではアナップ川上流に小学校がほしいと思っているが、全部で60世帯しかないので作ってもらえない。Pelagusの方が人がたくさん住んでいるのは確かだが、彼らは教育熱心ではない。実際にPelagusの小学校にまじめに通っているのはアナップ川上流から来た子供ばかりである。この村出身でカピットに住んでいる人もいる。タタウへ行く人も少ないがいる。総じてアナップ川上流はタタウよりもカピットのほうがずっとつながりが深いと言える。

アナップ川上流では、他に、Rh. Bilongも在村世帯の多いロングハウスである。Rh. SayongとRh. Gasahは

もともと世帯数の少ない村であり、在村する世帯数も少ない。Rajang 川流域からアナップ川上流へのイバンの移住は近年まで続いている。最近では、1983 年に Rh. Mancha が Rajang 川支流の Pila 川から移住してきた。しかし、その後相次いで人が亡くなり、ある 1 家全員が亡くなってしまった。「土地が熱い」との理由で、下流に再移住している。

Rh Gerina (Nanga Malat)

古いが、たくさん人のいるロングハウスであった。村長に現在の生業、ロングハウスの歴史、狩猟についてインタビューをした。また、加藤はジェイソンから頼まれた塩場のインタビューをした。

この村の人たちは、もともと Mukah 川の支流 Selangau 川から移住してきた（図 2 参照）。1941 年に Mukah から 1 回目の移住があり、1959 年に 2 回目の移住があった。Mukah では当時は 30 世帯が暮らしていた。Mukah では米があまり取れなかったため、イノシシやシカを求めてアナップ川に移住してきた。Mukah から船に乗ってタタウにつき、タタウから手漕ぎの舟でここにやってきた。移住してきた当時、ブカタンはすでにアナップ川中流で 2 村に分かれていた。1940 ～ 50 年代は、コメを作り、手漕ぎの舟でダマール、ジュルトン、ラタン、イノシシ、魚をタタウに売りに行っていた。4 日かけてタタウに売りに行き、5 日かかけて村に戻ってきた。1980 年代には、当時村にいた大多数が Kuala Tatau にある Rh. Nyalo（30 世帯）へ分裂して移住した。当時、この場所に残ったのは 6 世帯のみである。しかし 3 年後に 5 世帯が帰ってきた。現在は、23 世帯あり、全世帯に人がいる。

このロングハウスでは稲作と狩猟が盛んである。全戸で陸稲を育てている。水稲を栽培したことはない。陸稲は、時々十分に収穫できるが、不作の年もある。狩猟については、イノシシ、スイロクともに 1 年で 30 匹ぐらい獲れ、ホエジカはあまり獲れない。犬を連れて猟銃で狩猟をすることが多く、罠を仕掛けることは少ない。イノシシの肉などは、自家消費にすることが多い。その他、Zedtee やプランテーション会社で働く人が数人いる。

写真 3: Rh. Gerinaへのアプローチ。川岸から非常に長い桟橋が続く。

Rh. Banda (Kerangan Paji)

市川と加藤で各世帯の生業状況や、伐採会社との関係についてインタビューをし、鮫島は動物名のインタビューをする。また、ブカタンのアナップ川での移動、分裂の歴史や森林産物交易の歴史についてインタビューする。ラタン製品の作成が盛んなロングハウスである。ロングハウスの至る所に、加工途中のラタンおいてある。このロングハウスでは、稲作に従事する人の他に、伐採会社や町で働く人も多い。また、キリスト教ではなくイバンの在来信仰に従う人が多い。

アナップ川中流域におけるブカタンの移動史

ブカタンの歴史は、カプアス川にさかのぼる。カプアス川からサラワクに入り、カノウィットで長らく暮らしていた。カノウィットからは、Selangau へ移動した人たちもいた。1 集団はカノウィットに残り、もう 1 集団は Pelagus[1] を経由してアナップ川上流の Takan にやってきた。Takan では長らく住んでいたが、James Brooke の頃に政府に下流に住むように言われ、アナップ川中流の Malat 川河口に移住した。Tuan Ot と Taun Inyi[2] が治めていた頃である。その後、再び政府に言われ、Paum 川の下流に移住した（図 3）。

アナップ川中流域におけるブカタンの移動史は以下のようである。19 世紀後半には、Meraing が率いて、Paum 川河口に 15 世帯ほどで暮らしていた。その後 Asai の頃に Palung 川に移動した。Asai は Abang cai[3] が統治していた頃に 10 年ぐらい率い、1944 年に死亡した。1944 年には Beruang Gawan が引き継ぎ、18 世帯からなるブリアンのロングハウスで暮らした。その後 2 村に分かれる。下流の Nanga Pelawan では、Beruang Gawan が率い、10 世帯が暮らした。上流の Kerangan Paji は Lantai Jaban が率い、8 世帯が暮らした。これが現在の Rh. Jatun と Rh. Banda の前身である。

ロングハウスの跡地のことをブカタンでは *tevawei* という。

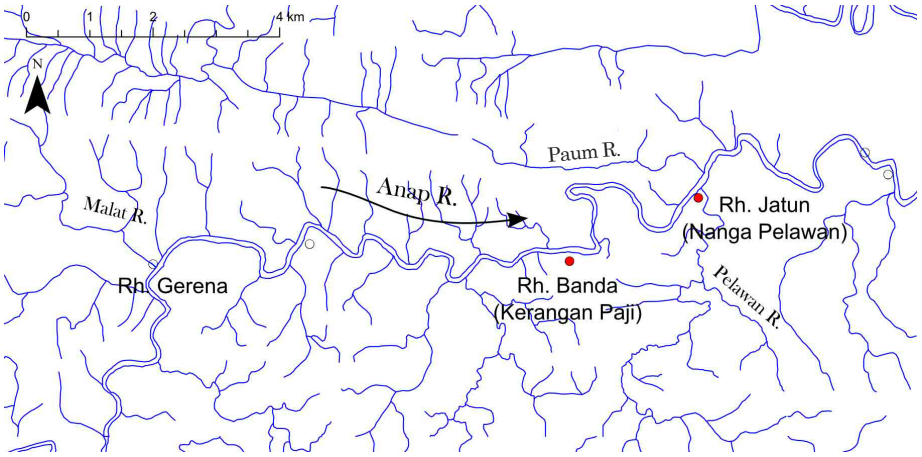

図3: Anap川中流のブカタンのロングハウス周辺の地図

これまで住んだことのある *tevawei* の場所は表 3 に示すとおりである。

Asai 村長の頃（1940 年頃）にはラタン、ダマール、エンカバンを採ってタタウの華人に売っていた。コメは育てたが少ししか収穫できずサゴヤシを食べることが多かった。当時食べていたサゴヤシは 4 種類 Jimako、Aping、Bulung、Balou であった。昔は全世帯がラタンからマットを作って売っていた。

伐採会社が操業を始めてからは、動物の量は減った。イノシシは 1 年に 1 匹とれるぐらいで、スイロクも同じぐらいである。ホエジカはあまり取れない。狩猟方法は、昔は投槍を使い、今は猟銃と罠猟を使う。この日のタご飯には、その夜獲れたマメジカのスープをいただいた。

写真 4: Rh. Bandaでマメジカのスープを食べながら夜のインタビュー。

写真 5: インタビューに協力してくれた方々と。

Rh. Jatun (Nanga Pelawan)

村長はタタウに行って不在であるため、ロングハウスの人に商品作物栽培と、伐採会社との関係について聞き取りをする。鮫島は数世帯からイノシシの骨を採集した。市川と加藤は世帯調査をおこない、他の民族集団との

Tevawei の名前	Tevawei の場所	村長の名前	備考
Tevawei Laput[4] Paum	Paum 川河口の左岸側		19 世紀末。まだ 2 村に分かれていない。 15 世帯。
Tevawei Tenuan	Tevawei Laput Paum の少し上流	Meraing	
Tevawei Lirung[5] Manang	Tevawei Tenuan の少し上流	Meraing	
Tevawei Majen	Tevawei Lirung Manag の少し上流	Asai	
Tevawei Palung	Tevawei Majen の上流の右岸側	Asai	
Tevawei Palung	上記と同じ場所の左岸側	Beruang Gawan	1944 年頃。18 世帯。ブリアンのロングハウス。
Nanga Pelawan	Pelawan 川の河口	Beruang Gawan	この時期に 2 村に分かれる。 現在の Rh. Jatun の前身。10 世帯。
Tevawei Paji	現在の場所の少し上流の丘の上	Lantai Jaban	この時期に 2 村に分かれる。 現在の Rh. Banda の前身。8 世帯。
Tevawei Belangir	現在の場所よりも少し下流	Selangong Senuni	18 世帯。Tevawei Paji から移住する。

表3: アナップ川中流におけるブカタンの tevawei の位置

婚姻関係についてインタビューをおこなう。

このロングハウスでは、稲作の他に伐採会社で働く人や町で働く人も多い。稲作は、陸稲のみで、いつも十分な収穫が得られる。また、Rh. Banda と同様に、Rh. Jatun においてもラタン製品の作成が非常に盛んである。ラタンはロングハウスの裏の丘からとってくる。狩猟では、猟に犬を使わず、森のなかを歩いて探すとのことであった。村の後背地にはまだ二次林が多く、そこで探すという。ここ 1 週間では 4 匹のイノシシを獲っていた。

伐採会社で働く人は 30 人ぐらいおり、Shin Yang で働く人が多い。Zedtee で働く人はいない。また、アブラヤシ・プランテーションで働く人が 3 人、アカシア・プランテーションで働いているのが 1 人いる。若い女性は 10 人ほどが都市の食堂でウェイトレスとして働いている。この村ではオイルパームを植えたいが、種がないので植えられないという。

Rh. Jatun よりも上流の村では、他の民族集団とのインターマリッジは、あまり見られなかった。しかし、Rh. Jatun では他の民族集団とのインターマリッジが比較的多く、なかでもカヤンと結婚する人がイバンと結婚する人よりも多かった。またブカタンの村では、他地域のブカタンとの婚姻関係もみられる。

Rh. Jalong (Nanga Buan)

タタウの町で市川は空港へ向かい、鮫島と加藤で再び船に乗り、Rh. Jalong を訪れる。タタウの人たちのロングハウスである。タタウの人口減少の昔話、タタウとルガットの関係、タタウ川流域での歴史、他民族との婚姻関係についてインタビューをする。また、数世帯から家系図の聞き取りをする。

写真 6: Rh. Jatunではラタンの採集や加工が盛んである。

写真 7: Anap川中流にある滝の前で。

このロングハウスの人たちは、11 年前（2000 年頃）にこのロングハウスに移ってきた。その前は、今よりも少し上流に 18 戸からなるロングハウスを建てて住んでいた。いま、その場所には 2 世帯しか住んでいない。今の村長は、1987 年に村長になり 24 年間村長をしている。その前は Li anak Sare が村長をし、7 戸が住んでいた。その前の 1947 年頃には、Dimang anak Jarap（イバンと結婚した）が村長をし、同じく 7 戸住んでいた。その前は Beyang が村長をした。ロングハウスは昔から 1 つだけであった。

生業活動は多様であり、稲作、ゴム栽培、伐採会社や都市で働く世帯が多い。稲作は、陸稲と水稲の両方を育てているが、水稲を植えている世帯の方が多いという。また 17 世帯のうち多くの世帯が最近ゴムを植え始めている。アブラヤシを植えているのは 1 世帯のみである。苗を育てるのが大変だからとのことである。道ができたら、ほかの世帯も栽培する予定であるという。このロングハウスでは、サラワクの他の都市のみならず、半島部や海外で働く人もいる。タタウにある工場ではインドネシア人しか雇わない。インドネシア人と同じ給料で地元の人は満足をするはずがないという。

イノシシは近くの森で、括り罠で獲ることが多いが、アカシア・プランテーションでも獲る。アカシア林は樹齢が若い頃はイノシシはいないが、成熟して実をつけるようになると、この実をイノシシが食べるので、イノシシが来るようになるという。

タタウの人たちによると、Tatau 語は Lugat と Melanau

の言葉に近いという。Sekapan と Kejaman と Lahanan の言葉とは少し遠いという。このロングハウスの人たちは他の民族集団とのインターマリッジが非常に多い。Iban が多く、Bekatan、華人、Punan、Kenyah、Melayu、Segan、Lugat など多様な民族集団と婚姻関係を結んでいる。村長の Jalong 氏いわく、かつては全員が親戚だったので、村の人同士で結婚するのは禁忌にふれた。このため結婚相手を Iban や Punan など他の民族集団から探し、村に住まわせて、村の人口を増やしていったという。

タタウ川流域におけるタタウの人たちの歴史

Penan がまだ森の中にいたころ、タタウは先に森から出てきた。タタウの人は昔、サゴヤシである Bulung や Balou を食べて生活していた。コメは食べなかった。昔住んでいた場所をタタウ語では *ugan* という。*ugan* は森の中や、川沿いなど様々な場所にある。

かつてはアナップ川最上流の Takan 川や Kakus 川に住んでいた。Takan にはタタウの植えたドリアンがまだ残っている。ブカタンが Takan にやってきたのはタタウが住んでいた頃よりもかなり後のことである。ブカタンが Takan に住んでいた頃、タタウ は Penyarai 川に住んでいた（図 2 参照）。タタウが Penyarai に住んでいた時のロングハウスの柱はまだ残っている。大きなブリアンの柱である。ブカタンは首狩りをして Rajang 川からやってきた。ブカタンがやって来るよりも先に、Punan が Balui 川から移住してきた。ブカタンの後にはイバンが移住してきた。かつて、イバンが首狩りをして人を殺したので、その時タタウの人たちは川の上流域に隠れて住んでいた。

昔はタタウの人口は多かった。今でも Bukit Bekuyat にタタウの骨がある。昔は、船に乗ってよく行ってみていた。その骨は大きくて長い骨だった。しかし、Penyarai 川にて大蛇を射止めたことなど、度重なる災いにより、ほぼ絶滅してしまった。この災いのことを *puru* という。かつては、*puru* という言葉を口にするのさえはばかられた。現在でもあまりこの単語はあまり口にしない。

タタウの人の墓である *keliring* や *salong* もタタウ川沿いの至る所にある。ここから上流に 15 分ほど船で行った Rantau Belak には、5 つの *keliring* と 2 つの *salong* がある。Kampung Melayu Tatau の道に入ったところにも昔 1 つ *keliring* があったが、洪水の際に水に浸かって倒れてしまった。その他、Rh. Roni（イバン）にも 1 つの *keliring*、Rh. Saban（イバン）にも 1 つの *keliring*、Belah 川の下流にある Rantau Belah にも 2 つの *keliring* があった。Penyarai 川にも 5 つの *keliring* があったが、川の中に沈んでしまった。Kuala Tengiliri や Kuala Miskin にも *keliring* があったが、こちらも川の中に沈んでしまった。これらのことから、かつてタタウ川の至る所に彼らが住んでいたことが想像できる。タタウの人たちが大蛇を射止めた後の人口減少の話は、とても興味深い物語である。ここでは紙面の都合上記載できないので、別稿に譲りたい。

まとめ

本稿では、アナップ川流域のロングハウスの概況を示すことを目的とした。上述したように、各ロングハウスの状況は多様であり、今回調査をした 6 つのロングハウスの状況をもってアナップ川流域全体に一般化させることはできない。しかし、調査を行った各ロングハウスの移住の歴史、森林産物交易の歴史、基本的な生業に関する概要を把握することはできた。また、村周辺での開発の様子や他民族との婚姻関係についても基本的な情報を得ることができた。

今回行った世帯調査の結果については、今後 Kemena 川流域で行った世帯調査の結果と比較検討する予定である。また、森林産物交易の歴史については、別稿に記す予定である。狩猟調査については、盛んに狩猟をおこなっていた Rh. Mawang 周辺でカメラを設置し、調査票への記入と動物の毛のサンプル収集を依頼してきた。調査結果の一部は同ニュースレターの加藤・鮫島の記事にも記した。この調査では、各ロングハウスのおおよその概況を把握することに努めたため、ここで記した内容には不十分な点があるかもしれない。その場合には、後続のニュースレターにて、随時情報を更新していただけると幸いである。

脚注

[1] 先行研究によると Merit とある。

[2] Tuan Ot と Taun Inyi がどういった役職の人物であるのかは、不明である。

[3] Abang cai がどういった役職の人物であるのかは、詳しく聞かなかった。

[4] ブカタンの言葉で Laput は川の河口を意味する。

[5] ブカタンの言葉で Lirung は川の淀みや深みを意味する。

Sarawak Planted Forest (SPF) プロジェクトでの野生動物による塩場の利用

Jason Hon (WWF マレーシア)

はじめに

本報告は、SPF での短期的なカメラトラップ調査結果の簡単な報告である。サンプリング場所は、本報告で「塩場」と称するブロック T1A の天然の塩場である。

カメラトラップは、カメラ正面の動物の動きを感知する受動型赤外線センサーを用いた自動カメラで、動物が動くと、カメラが正面を通り過ぎる物を撮影するために作動し、静止画像又はビデオ形式のいずれかを記録する。

本調査は、以下を目的とした：

1) アカシアと二次林のモザイク景観の中での塩場を利用する野生動物の種の記録

2) 塩場からの距離が野生動物によるパッチ占有確率 (occupancy rate) に及ぼす影響の解明

サンプリング場所は、ブロック T1A 内の川沿いバッファーゾーンの中に位置した。ブロック T1A 内には、自然に生じた塩場がある。カメラトラップは、塩場自体と、塩場から直線的に 200m 間隔の地点に配置した。塩場は川に隣接しているため、すべてのサンプリング地点は川岸からの距離を同じに保ち、水又は川が動物の存在確率に及ぼす影響を抑えた。カメラトラップは、2011 年 5 月 10 日～ 2012 年 3 月 6 日にサンプリング地点に設置した。総調査努力量はのべ 2,026 カメラ日となった。

予備的な結果及び考察：

種構成

カメラトラップからは、全部で 17 種 / 分類群が記録された (表 1)。ツパイの 1 種とホエジカについては、種の確実な識別ができなかった。T1A の塩場で記録された画像又はビデオの数が最も多かった 3 種は、順にスイロク、ヒゲイノシシ、マレーグマであった。

塩場は、有蹄類（大部分が草食動物）にとって重要である。これは彼らのえさには、一般的には植物体中に少ない特定のミネラル（陽イオン）が含まれず、塩場のような他の供給源からのミネラル摂取が重要となるためである。塩場の水は、川の水よりもミネラル含有量が多いと推測される。この理由で、スイロクは頻繁に塩場を訪れる。結果は、T1A 内にスイロクの数が多いこと、SPF のアカシア・二次林モザイク景観の中でうまく生存できる可能性があることを示した。

一般名	学術名
ジムヌラ	*Echinosorex gymnurus*
ツパイ属の一種	*Tupaia spp.*
クリイロリーフモンキー	*Presbytis hosei*
ブタオザル	*Macaca nemestrina*
マレーセンザンコウ	*Manis javanica*
クリームオオリス	*Ratufa affinis*
バナナリス	*Callosciurus notatus*
マレーヤマアラシ	*Hystrix brachyura*
ボルネオヤマアラシ	*Thecurus crassispinis*
マレーグマ *	*Helarctos malayanus*
チビオマングース	*Herpestes brachyurus*
ヒゲイノシシ *	*Sus barbatus*
ジャワマメジカ	*Tragulus kanchil*
オオマメジカ	*Tragulus napu*
ホエジカ属の一種	*Muntiacus spp.*
ボルネオホエジカ	*Muntiacus antherodes*
スイロク *	*Rusa unicolor*

表 1: T1A から記録された種
塩場自体で記録された種には、「*」のマークを付けた。

塩場からの距離

ソフトウェア PRESENCE (Hines 2006) を用いたさらなる分析に十分なのは、スイロクのデータのみであった。結果は、すべてのサンプリング場所で占有確率が極めて高いことを示した（Ψ = 1.0)。スイロクの調整前占有確率 (naive occupancy probability) の値は、0.875 であった。

しかし、(記録間の時間間隔を問わないすべての記録を含む) 画像及びビデオ数は塩場自体で最も多く、塩場からの距離が増すにつれて減少し始めた (図 1)。

塩場地点自体から得られた多数の記録は、スイロクが塩場でかなりの時間を過ごすことを示した。T1A の

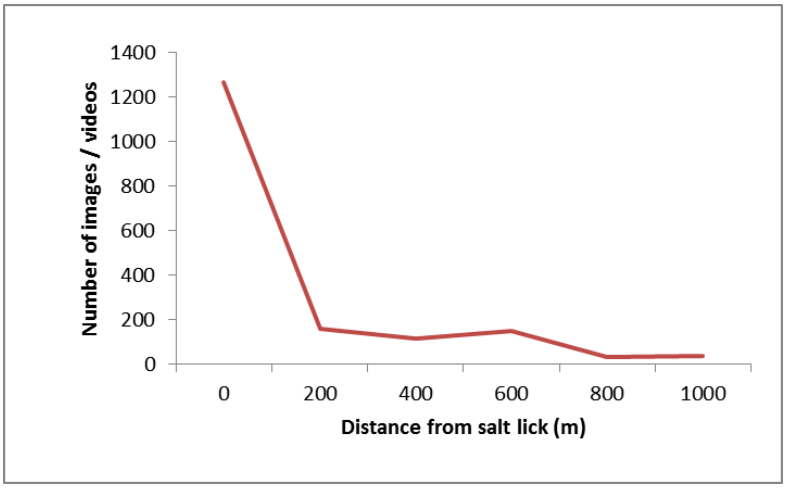

図 1: ブロック T1A の塩場からの距離ごとのスイロクの記録数（画像及びビデオ）

塩場では水分を摂るスイロクの記録がたくさんあった。また繁殖行動や草を食べるといった他の活動も記録されていた。

本調査の結果は、ブロック T1A にある塩場の保全が多くの野生動物、特にスイロクにとって重要であることを示した。スイロクの占有確率は塩場地点及び川沿いバッファーゾーン全体で極めて高かったため、野生動物の長期的な存続にはこのような生息環境を維持することが不可欠であると言える。アカシア植林地自体からのデータは得られなかったため、アカシア、川沿いバッファーゾーン、塩場の比較を行うことができない。しかしこの短期的な調査の結果は、川沿いバッファーゾーンと塩場が野生動物の重要な居住地であり、SPF の中で保全しなければならないことを示した。

謝辞

この調査の実施の許可について、SPF 社及び Grand Perfect (GP) 社に心より謝意を表する。 現地調査の実施には GP 社スタッフ、特に Joanes Uggang、Belden Giman、Alex Jukie、Nyegang Megum の各氏にご尽力いただいた。本プロジェクトは、日本学術振興会基盤 S「東南アジア熱帯域におけるプランテーション型バイオマス社会の総合的研究」からの資金援助を受けた。

（日本語訳：鮫島弘光ほか）

引用文献

Hines, J. E. (2006). PRESENCE4- Software to estimate patch occupancy and related parameters. USGS-PWRC. http://www.mbr-pwrc.usgs.gov/software/presence.shtml.

関連活動記録

2014 年 1 月 29 日～ 2 月 7 日 プロジェクトメンバー活動報告

今回、短い期間ではあったが、石川登、小林篤史、祖田亮次の 3 名でアブラヤシ・プランテーションおよび森林産物交易に関する視察と調査を行った。今回は中国新年と重なったため、思うように動けない部分もあったが、一定の成果が得られた。

石川、小林、祖田はそれぞれ別経路でサラワク入りしたが、2014 年 1 月 30 日にビントゥル・オフィスに集合して打ち合わせを行った後、ビントゥル郊外の天然ガス・プラントやスクウォッター地区などを視察した。

31 日は SOPB（Sarawak Oil Palm Board）のプランテーションで働くインドネシア人労働者に対して、聞き取りを行った。今回は、トゥバウの SOPB が持つ 3 つの地区のうち、第 2 地区の労働者宿舎を訪問した。そこには約 400 人の労働者が居住しており、ほとんどがスラウェシ出身のブギスで占められていた。イスラム礼拝所（スラウ）やサッカー場、セパタクロー・コートなどが設備されており、近隣のイバンが経営する雑貨店もある。他の地区の労働者の民族構成は分かっていないが、近年ではスラウェシ出身者の数が増加していると多くの人が語っていた。これは、SOPB の労働者に限ったことなのか、他のプランテーションでも同様の傾向にあるのか、もしインドネシア人労働者の「ブギス化」あるいは「スラウェシ化」がという現象が進んでいるとすれば、その要因や背景は何なのか、今後詳しく調べる必要がある。

Sebiew 橋下の Penan のスクウォッター

アブラヤシ・プランテーションの労働者宿舎

2 月 1 ～ 2 日は、インドネシア人を雇用しているアブラヤシ小農、およびその労働者に聞き取りを行った。今回は、スラウェシ出身のブギスとマカッサル、西カリマンタン出身のサンバス・マレーとビダユ（ジャゴイ）の労働者から話を聞くことができた。非正規で就労するインドネシア人が、どのようにマレーシアに入国し、仕事を探し、帰国／再入国するのかは、最初の就業先や職種、出身地などによって、さまざまな方法とルートがあることを確認できた。これらについても、今後、事例の蓄積を進めていきたい。

2 月 2 日の午後は、いったんビントゥルに戻り、すでに現地入りしていた竹内やよい氏の案内でカンポ

小農のアブラヤシ園で働くインドネシア人のランカオ（出作り小屋）

ビントゥル郊外のラタン工場

ン・バルの近くにあるラタン工場の見学を行った。

2月3～4日は、ジュラロン川支流クブル川沿いのルマ・ジュソンにおける竹内氏の植生調査を視察した。竹内氏がSFC（Sarawak Forestry Cooperation）のスタッフと調査を行っていたプラオ（村の保存林）は、ロングハウスから徒歩で20分程度の場所で水源林となっている場所であった。プナン／イバンの混成村であるルマ・ジュソンは、石川・祖田が昨年8月に行ったランカオ（出作り小屋）調査においても重要な事例であったため、今回はロングハウスで補足的な情報収集を行うこともできた。

2月5日は、小林・祖田はクチンのサラワク統計局やサラワク博物館古文書部署、サラワク州立図書館などで若干の資料収集を行い、石川はビントゥルでUNIMAS（Universiti Malaysia Sarawak）のジャイル・ランゴブ氏やアンドリュー・アエリア氏らと研究打ち合わせを行った。2月6日は、石川・祖田がジェイソン・ホン氏とともにSOPPOA（Sarawak Oil Palm Plantation Owners Association）のメルビン・ゴー氏を訪問し、サラワクのアブラヤシ・プランテーション産業に関する情報交換を行った。

同定用のサンプル葉をパチンコで採る

ラタンの植生調査を行う竹内氏

サラワク統計局図書室での資料収集

ボルネオの狩猟採集民研究の動向 第10回国際狩猟採集社会会議に参加して

加藤 裕美（京都大学 白眉センター／東南アジア研究所）

2013 年 6 月 25 日から 28 日かけて、イギリスのリバプール大学で第 10 回国際狩猟採集社会会議（10th International Conference on Hunting and Gathering Societies、以下 CHaGS）が開催された。本稿では、会議に参加した感想を交えつつ、会議で発表された、ボルネオの狩猟採集民に関する研究紹介を行いたい。この会議は 2002 年にエジンバラ大学で開催されて以来、11 年ぶりの開催となった。2007 年に開催予定であったインド側のマネジメントが上手くおこなわれず、翌年に延期になり、結局インド大会は中止となり今年に至った。今回の主催者は、アフリカの考古学が専門のラリー・バルハムである。発表者は、約 30 か国から 250 人ほど集まり、参加者は 300 人ほどいたと思われる。参加者は、イギリスで開催されたこともあり、欧米の研究者が多く集まった。その他、インド、南米、東南アジアやアフリカからの参加者も少数ながらいた。日本からは約 20 名ほどが参加した。研究対象として最も多かったのが中部アフリカのピグミー、次いで南部アフリカのサン、次いでインドやボルネオ、フィリピンが続いた。

ボルネオについては 8 人の研究者が口頭発表を行った。パリ国立科学アカデミーの Bernard Sellato 氏、イギリスのニュキャッスル大学の Peter Sercombe 氏、スウェーデンのウプサラ大学の Lars Kaskija 氏、フィンランドのヘルシンキ大学の Keneth Sellinder 氏、フランス自然史博物館／京都大学海外学振 PD の Nicolas Cesard 氏、デンマークのコペンハーゲン大学の Mikael Rothstein 氏、マレーシア科学大学の Lye Tuck Po 氏、そして加藤である。イギリスで開催されたためか、欧州の研究者の参加が多かった。以下では、各研究者の発表内容について簡単に紹介したい。なお、カリマンタンのプナンの研究をしているケント大学の Puri Rajindra 氏やモンペリエ大学の Edmond Dounias 氏も参加したが、それぞれボルネオではなくインド、アフリカの研究成果について発表を行っていたので本稿では割愛する。

第 10 回国際狩猟採集社会会議のパネルの様子
司会を行うラリー・バルハム氏

まず 1 日目には、“hunter-gatherer sociality”のセッションで、Lars Kaskija 氏が “Sociality and livelihood among Punan of Borneo” と題した発表を行った。この発表では、狩猟採集民の生業の特徴ではなく、社会的な特徴について考察された。個人主義、各家族の自主性、機会主義、分配の重視、社会的平等性は、狩猟採集社会の特徴として述べられてきた。これらの特徴は、狩猟採集民のみならず、被差別民、下位集団、行商人、マイノリティなどにみられることもあり、そういった社会と狩猟採集社会を比較する必要があるだろうという発表であった。

同じセッションで Kenneth Sillander 氏が、“Open-aggregated organization and associated patterns of sociality” と題した発表を行った。この発表では、狩猟採集社会に共通してみられる開かれた集合性や社交性の特徴について検討された。流動的な社会、個人の自主性、平等主義、社会的連帯などの狩猟採集社会にみられる特徴は、Sillander 氏が研究対象とするカリマンタンの Bentian などのような、人口統計学的に小規模で地理的にも隔離された移動耕作社会にも見られるという。こういった特徴がなぜ小規模な農耕民の間でもみられるのか考察された。

2 日目には、“cultural resilience” のセッションで、Peter Sercombe 氏 が、“Penan folk tales: Themes, forms and functions” と題した発表を行った。Peter Secrombe 氏は応用言語学者である。ブルネイやバラム川流域のプナンで収集したスケットの語りに見られる言語学的特徴やスケットの機能についての発表をした。スケットには非常にたくさんの種類があり、そのテーマや機能について分析された。スケットの機能としては、道徳的な教示、神話性、動物との関係性、また単に楽しみのためといった機能がある。現在 Penan を取り巻く状況はより大きな世界との政治的な関係性が重要になってきているが、そのような状況においても日常生活で語られるスケットの機能について分析していた。

また、“dance and ritual” のセッションでは、Mikael Rothstein 氏が、“The alimentary construction of social and supernatural identities: Commensality codes and cultural resilience of the Eastern Penan”と題した発表を行っ

た。この発表では、Penan の神と精霊の概念や道徳や倫理と言ったものが議論された。キリスト教化、ロギングなどによりプナンの文化は脆弱化しているのか議論された。そのなかで、現在みられる共食などから従来のプナンの文化の再生産について考察していた。

3 日目には、“hunter-gatherers and their neighbors” のセッションでは、Nicolas Cesard 氏が、“Acculturation or continuity? The adoption of marriage payments among the Punan Tubu (Indonesia)” と題した発表を行った。この発表では、カリマンタンの Punan Tubu の婚資の複雑化について考察された。これまで、Punan Tubu における婚資の支払いは、花婿の父親から花嫁の父親への支払いだった。しかし、現在では花婿の父親から花嫁の父親へ支払われた婚資が花嫁の父親からその兄弟へ再分配され、また花嫁の父親から花婿の父親への婚資の返礼が行なわれている。婚資の分配について、拡大化、複雑化している状況が考察された。

また、4 日目には同じセッションで加藤裕美が、“Resilience and flexibility: history of hunter-gatherers’ relationships with their neighbors in Borneo” と題した発表を行った。この発表ではシハンと農耕民、華人、マレー人、Penan などの周辺の人々との関係性を通史的に考察した。そして、それぞれの「隣人」との間の、交易や賃労を通した開かれた経済的な関係性、現在の土地問題や町での居住、開発プロジェクトの獲得を通してみられる政治的な緊張関係、さらに個人レベルの婚姻に見られる複雑な社会関係について考察した。

最後に、“hunter-gatherer crafts” のセッションで Bernado Sellato 氏が ‘Punan crafts and past and present cultural and economic trends: ″We taught them so they could produce for us “’ と題した発表を行った。そこでは、狩猟採集民の物質文化は農耕民と比べて元来貧しいが、一度農耕民から吹き矢、製鉄、犬飼の技術を教えられると、農耕民に勝る技術を発達させる状況が述べられた。特に、ラタン工芸に関していうと狩猟採集民は農耕民との交易の需要によって様々な種類の手工芸品を生み出してきた。定住後においても多数の工芸品、モチーフを生み出し、それはツーリズムによってボルネオを越えて世界へ流通するようになった。しかし、現在では下流の人々が逆にこういったモチーフをコピーし、プナンのマーケットを妨害する状況が指摘された。

同じセッションで Lye Tuck Po 氏は、“Combs, baskets and mats: The practice of craft and the craft of hunter-gatherer history” と題した発表を行った。マレー半島のバテッとブラガの西プナンにおける手工芸品の作製について比較を行った。バテッの代表的な手工芸品は竹櫛である。竹櫛は文化的装飾と言え、個人的な思い出や好きなイメージを装飾に投影するものである。非常にプライベートなモチーフが装飾に投影される。一方、プナンのラタン工芸は、外部から教えられた工芸品やモチーフが、コミュニティ間で共有され、使用されていた。バテッにおける工芸品がより個人的なものであるのに対し、プナンの工芸品はより集団的であると示唆した。

また、口頭発表ではなかったが、ポスター発表で金沢謙太郎氏が “The nomadic Penan in Sarawak: Their Life Strategy over Environmental Change” と題した発表を行った。

感想として、今回発表された内容は、これまでも扱われてきた口頭伝承、物質文化、婚姻関係、狩猟採集民と農耕民の関係などオーソドックスなテーマが多かった。しかし、そのなかでも口頭伝承からより内面的な精神文化へ、また物質文化や婚姻関係を扱う中で農耕民、外部集団、外部社会とのつながりなどが、強調されていた。そうしたそのなかで、狩猟採集民の「社会性」について考察がされていた。個人的な感想としては、ボルネオのみならず世界各地の狩猟採集民を研究対象としている若手研究者と今後の研究の問題点を議論でき、大変刺激になった。またボルネオの研究者は、これまで本でしか読んだことがなかった人たちばかりであったが、みな大変親切で有益なコメントをたくさんくださった。毎晩学会後にはパブに場所を移してお酒を酌み交わしながら議論ができて大変良い経験となった。それと同時に、日本人の研究があまり世界では知られていないことも痛感した。今後、私たちは研究成果が世界に向けて発信されているかいなか、常に検討しなければならないことを身を持って感じた。

学会後は連日ボルネオ研究者で集まり情報交換に努めた

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川　登	人類学	京都大学 東南アジア研究所
研究分担者	祖田　亮次	地理学	大阪市立大学 文学研究科
	河野　泰之	自然資源管理	京都大学 東南アジア研究所
	杉原　薫	ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ･ﾋｽﾄﾘｰ	政策研究大学院大学
	水野　広祐	農業経済学	京都大学 東南アジア研究所
	徳地　直子	森林生態保全学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	内堀　基光	文化人類学	放送大学 教養学部
連携研究者	鮫島　弘光	生態学	京都大学 東南アジア研究所
	藤田　素子	鳥類生態学	京都大学 東南アジア研究所
	甲山　治	水文学	京都大学 東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	津上　誠	文化人類学	東北学院大学 教養学部
	奥野　克巳	文化人類学	桜美林大学 リベラルアーツ学群
	市川　昌広	東南アジア地域研究	高知大学 農学部
	小泉　都	生態人類学	京都大学 農学研究科
	生方　史数	天然資源経済学	岡山大学 大学院環境生命科学研究科
	市川　哲	文化人類学	立教大学 観光学部
協力者	定道　有頂	ﾗｲﾌｻｲｸﾙ･ｱｾｽﾒﾝﾄ	日本エヌ・ユー・エス株式会社（JANUS）
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学 白眉センター / 東南アジア研究所
	田中　耕司	東南アジア地域研究	京都大学 研究国際部学術研究支援室
	佐久間　香子	文化人類学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	小林　篤史	歴史学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学 地域研究統合情報センター
	内藤　大輔	地域研究	総合地球環境学研究所
	Jason Hon	動物生態学	WWF マレーシア
	加藤　裕美	文化人類学	京都大学 白眉センター / 東南アジア研究所
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak（UNIMAS）
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak（UNIMAS）
	Abdul Rashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak（UNIMAS）
	Lee Hua Seng	森林社会学	元 Sarawak Timber Association
	太田　淳	歴史学	広島大学 文学研究科
	鹿野　雄一	河川生態学	九州大学 工学研究院
	竹内　やよい	生態学	国立環境学研究所
	目代　邦康	自然地理学	公益財団法人 自然保護助成基金
	大竹　真二	映像人類学	モイ
	木谷　公哉	情報学	京都大学 東南アジア研究所
事務局	田中　園子	総務・会計担当	京都大学 東南アジア研究所
	中根　英紀	情報管理・発信担当	京都大学 東南アジア研究所

編集後記：

本ニューズレターはプロジェクトメンバー以外の方にも配信いたしております。

配信を希望される方は事務局：（nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

またイベントのお知らせ、過去のニューズレターなどは当プロジェクトのホームページ：（http://biomasssociety.org/）で見ることができますので、そちらの方もご参照ください。

（鮫島弘光）

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX:075-753-7338
http://biomasssociety.org
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 鮫島 弘光 中根 英紀（基盤S事務局）

元Sim Swee Joo社構内に展示されていたかつての交易船
（写真：祖田 亮次）